様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００１２１

研究課題名（和文）19世紀スイス・シャレー建築の理想イメージの変遷と国内外受容文化史の構築

研究課題名（英文）Cultural reception history of the ideal image of the Swiss chalet architecture in the 19th Century between inside and outside Switzerland

研究代表者
河村　英和（Kawamura, Ewa）

跡見学園女子大学・観光コミュニティ学部・准教授

研究者番号：５０６４９７４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：スイスが憧れの旅行先となった18世紀末以降、スイスの山小屋（シャレー）風建築は、英国貴族の庭園装飾に端を発して世界各国に広まった。欧州では主に19世紀、米国は20世紀前半、日本は20世紀後半に興隆し、国によって流布する時代、建物の用途、立地の傾向は異なっている。英独仏伊米日の事例を比較した結果、ヨーロッパのシャレー風建築はアルプスを想起させる山岳地の宿泊施設だけでなく、地理的親和性のない温泉地や海浜地の別荘、湖畔や水際のボート小屋、ホエイ療養施設、ミルク小屋、飲食店でも使用された。欧米と異なる日本での特徴は、シャレーだけでなくハーフティンバー意匠も山岳建築を想起させるものと扱われたことだった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
外国にできた人気の観光地を象徴する建物を模し、旅行者の母国にそのコピーや着想を得てデザインした建物を造ることは、古今東西で行われてきた。本研究では、スイスのシャレー（山小屋）建築をモデルにした建物に特化して、スイス国外で派生した事例を集めてその傾向を国別に分析したが、同手法で様々なコピー建築の需要の文化史の構築への応用が可能となる。「旅」という名の社会現象が、建築物へ与える影響力は強い。異国への憧れを建物に具現化させたものは、醜悪でキッチュであるがゆえに解体される運命にあるのか、自国の文化の一端として昇華できるのか。主要欧米各国の事例の収集と日本の事例を比較することによってその問題提起とした。

研究成果の概要（英文）：After the end of the 18th century, when Switzerland became one of the most fashionable travel destinations, Swiss chalet-style architecture spread in many countries, starting as a rustic cottage in the English gardens. Swiss chalet-style buildings flourished mainly in the 19th century in Europe, in the first half of the 20th century in the United States, and its second half in Japan. So, its period, use purpose, and location tendencies differed from nationalities. A comparison of examples from the U.K., Germany, France, Italy, and Japan revealed that European chalet-style architecture was used not only for hotels and villas in mountainous areas reminiscent of the Alps, but also for villas in hot springs and seaside areas with no geographical affinity, boathouses by the lake or river, whey treatment facilities, milk stands, restaurants, and so on. In the Japanese case, it was found that not only chalets but also half-timbered buildings were popularized as evocative of mountain resorts.

研究分野：建築史、観光史

キーワード：シャレー　山小屋　模倣　スイス　チロル　ホテル　別荘　牛乳

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

スイスの伝統的な山小屋風建築を指す仏語の「シャレー chalet」という言葉が流布するきっかけは、スイスの自然美への称賛が盛り込まれたジャン=ジャック・ルソーの書簡体小説『新エロイーズ Julie ou la Nouvelle Héloïse』（1761）の中で、主人公たちの逢引きの場としてシャレーが登場したこととされる。しかし 18～19 世紀末までに刊行されたスイスに関する文献（英・独・伊）を逍遥しても、「シャレー」はまだ外来語として定着しておらず、Swiss cottage（英）や、Schweizerhütte または Schweizerhaus（独）、capanna svizzera（伊）というように、「家」や「小屋」という単語に「スイス」を形容したものでシャレーの代替とされるのが一般的だった。

18 世紀まではイタリアへ向かう馬車旅行での交通路に過ぎなかったスイスが、「崇高」の美意識によって高山・渓谷・氷河・滝といった畏怖すべき自然が評価され、19 世紀には人気の観光目的地となり、スイスの景観は画家の恰好の題材となり、その中にシャレーの姿も描き込まれることも増え、建築家はシャレーを掲載した図面集を出版した。スイス風の「素朴な rustic」な建物をスイス国外で建設する流行は、18 世紀後半の英国の事例が最も早く、当初は本場スイスのものと似ても似つかぬものが「スイス・コテージ」と称して建てられたが、19 世紀ロマン主義時代はピクチャレスク嗜好の浸透とその流れのなか、シャレー風建築が、絵を描いたような美しい風景を演出できるものとして、スイス以外のヨーロッパ各地でも建設されるようになった。

スイス・シャレーに対して我々が持っている典型的なイメージは、いつ頃から形成されていったのだろうか？　スイス・シャレーの建築文化史に関する近年の優れた研究成果には、チューリヒ工科大学（ETH）の博士論文として提出された、Karin von Wietersheim Eskioglou（2004）と Daniel Stockhammer（2015）の業績がある。スイス・シャレーをモチーフにした観光土産については、Franziska Nyffenegger（2016）の論考が、シャレー建築がスイスの国家イメージのアイデンティティ表現の一つであることを査証する点で興味深い。しかし、いずれもスイス国内でのシャレー受容史としての位置付けにあり、スイス国外で巻き起こったシャレー建設ブームに着目・特化した研究は非常に少ない。スイス国外にできた岩山を主体とする庭園での疑似スイス的景観についての Kilian Jost（2015）による研究で、19 世紀ドイツに建ったスイス風の家の事例が取り上げられたのと、19 世紀にフランスに建ったスイス・シャレーに関する Christina Horisberger（2001）と Michel Vernes（2006）の論文があるぐらいであった。その状況は今もほとんど変わっていない。

２．研究の目的

19 世紀前半のロマン主義時代、スイス・シャレー（あるいはスイスの家）は、オペラや文学にもしばしば登場するようになり、シャレー建築は外国人がスイスをイメージするさいの、マッターホルンや乳牛に並ぶ典型的なスイスらしさの表象と化し、国家のアイデンティティ表現の一つにまでなった。そのためシャレーは、スイスの観光やスイス製品の広告図像、土産品や工芸品のモチーフとなり、万国博覧会でのスイスからの展示ではシャレーがよく建設・披露された。そんなシャレーがスイス以外の主要各国において、どのような文化的アイコンとなったのか、典型的なシャレーのイメージは時代によってどのように変わってくるのか、数多くの事例を収集・検証しながら比較・検討し、19～20 世紀初頭までにスイス国外で形成されていった、外国人の目からみたスイス・シャレー建築の模倣と受容の変遷史を構築する。

３．研究の方法

主たる方法は資料収集による。スイス・シャレーが描かれた 19～20 世紀初頭の図像史料としては、スイスを舞台にした小説・旅行記や当時の絵入り新聞に挿入された挿絵、シャレーを描いた（または設計した）版画家・画家・建築家の作品、建築図面集、万国博覧会カタログ、欧米主要各国の建築雑誌、当時の印刷物（チョコレートやスープなどの食品のおまけに付く多色刷り版画カード、エピナル印刷に登場するシャレー建築工作用の彩色版画、観光ポスター、観光絵葉書など）等である。シャレーをモチーフにした当時のスイスの観光土産（木製模型、オルゴール箱、カッコー時計、木彫りの皿など）も視覚造形史料として参考にする。

当時の人々が抱いたシャレーに対する印象を探るための一次文献としては、シャレーを舞台にした当時のオペラ・演劇の台本、有名無名人が書いたスイスを舞台とした小説・旅行記、スイス旅行中の書簡・日記、18 世紀末から 20 世紀初頭までに刊行された旅行ガイドブックをできうる限り数多く閲覧して、シャレーやスイス風の建物について述べられた箇所を収集する。スイス国外でのスイス・シャレーやスイス風の家が建設・移築されている場合が本研究ではとくに重要なので、スイス以外の国を扱った当時の観光案内書や旅行記も多数閲覧する。

建物の現状調査も随時行ったが、それが欧州各国で遂行できたのは 2019 年 2 月までだった。その後は COVID-19 の感染拡大と予防のため、2020 年度からは欧米で現存するシャレー建築の現状は Google ストリートビュー上での確認になり、実際に現地へ赴く調査は日本に建ったシャレー風建築に留めた。なお日本の事例は 20 世紀後半のバブル期に偏っているので、資料としては関連する過去の新聞・ホテル雑誌の記事や郷土史書、自治体が公開する計画書等を収集した。

４．研究成果

まずは仏語の外来語の「シャレー」が、スイスの伝統山小屋建築を指す言葉として、19 世紀半ば以降に欧州各国に普及する過程を 18～19 世紀当時刊行された一次文献での使用例から検証した。19～20 世紀に開催された各国の万博会場には、「スイス村」やシャレーが建設されたり、英仏の文人たちがスイス・シャレーを執筆活動用の別邸にしたりすることもよく行われ、シャレー風建築の存在が町の景観に華を添えたフランスの保養地の事例も少なくなく、コロナ禍中前までの研究期間では、それらの実地調査も行った。

イタリアでスイス人によって開業・営業された 19～20 世紀初頭のホテルでは、屋号がスイスにまつわる地名や国名で命名される場合のみならず、その建物のデザインがスイスの郷土様式「ハイマートシュティール Heimatstil」やシャレーの影響下にあるもの（切妻屋根と破風板の透かし装飾を取り入れる）も幾つか存在していたことや、イタリアの一部の山岳地域は、気候の類似性から「小さなスイス Piccola Svizzera」と呼ばれる場所があり、そこにできた建物はスイス風の山小屋の影響を受けることもあった。

ドイツ語圏ではロマン主義時代より、フランケン・スイス Fränkische Schweiz やザクセン・スイス Sächsische Schweiz などと、各州で奇岩や岩石を特徴とする自然景観がある一帯が、スイスと呼ばれるようになったが、必ずしもそれらの地域にシャレー風建築がとくに多いというわけでもなく、むしろ地元の「木骨造 Fachwerk」の伝統民家が主流で、スイス風シャレーは風景に風情を加味させるフォリー的なものか、保養地特有の娯楽建築の一種のような立ち位置にあった。

19 世紀に結核や肺病などの治療に有効とされたスイス発のホエイ療法が、ドイツ語圏を中心に「ホエイ療養施設 Molkenkuranstalt」で展開されるが、その建築デザインは、スイスにできたものよりもスイス国外の施設のほうがシャレー様式であることが多い。それはスイス産の乳牛のイメージをシャレー建築でもって、視覚的にスイスらしさを表現できるからである。やがてホエイ療法は廃れ、健康的な嗜好品としてのミルク飲用施設へとシフトし、施設の名称も「ミルク療養施設 Milchkuranstalt」や「スイス小屋 Schweizerei」（厩舎付きのミルクが飲める施設）、「ミルク屋 Meierei」（生乳工場ではなくミルクも供するカフェレストランを指すとき）、「ミルクホール Milchhalle」（ホールといってもホールのような広さのものからスタンド屋台のものもある）など、規模や用途に応じて多岐にわたり、20 世紀初頭も欧州各国に広まった。

一方、日本初の偽スイス風建築は、おそらく英国人ジョサイア・コンドルが設計した東京の旧・岩崎邸のスイス・コテージ風の離れのビリヤードルーム（1896 年）であろう。西洋の住宅建築に造詣が深い建築家の西村伊作は、自著『楽しき住家』（1919 年）のなかで、スイスの山小屋は日本の山岳地帯の住宅にも応用できること、『生活を芸術として』（1922 年）では「瑞西の山荘」が日本の風土にも合わせやすいことを述べている。実際 1920～30 年代の日本では財閥などの有力者たちが、スイスの山小屋建築に関心を寄せ始め、私邸にその様式を取り入れて建設させることが行われた。同じころ、本場のシャレー様式には全く忠実ではないものの、スイスの山小屋風をイメージした意匠のホテルも日本各地に建つようになる。しかし、それらは日本の山間の伝統的な木骨造の意匠との類似・親和性から独自に生み出された疑似・折衷的なものだった。

戦後は高度経済成長期に伴うレジャーブームと、日本人によるマナスル初登攀（1956 年）後の登山熱、札幌（1972 年）・長野（1998 年）での冬季オリンピック開催で高まったスキーブームによって、山岳地を中心にシャレー風の宿泊施設が増加してゆくが、やがて英国風の木骨造「ハーフティンバー half-timbered」意匠の建物も高原リゾートらしさを表現するものと誤って解釈されるようになり、スイスやチロル風の山間の民家や、イギリスの田園地帯の木骨造（ハーフティンバー）のコテージ風建築や英チューダー様式との奇妙な共存も顕著になってきた。

日本にできたスイスの山小屋（あるいはシャレー）から着想された建物は、数も分布地も非常に多く、研究期間内の調査地は、四国・沖縄を除くほとんどの都道府県に及んだ。山岳地・高原リゾートに集中するものの、スイスのレマン湖を想起させる湖畔の立地も含まれた。バブル期にはスイス風建築の影響を受けた公共建築に、レマン湖に浮かぶ「シヨン城 Château de Chillon」をイメージしたものや、スイスの教会の鐘楼をモチーフとするものまで登場しており、建物単体のみならず町並みやスイス村を形成する場合も少なくない。銭湯の壁画・タイル画にアルプスやレマン湖畔風の風景が描かれる現象は、おそらくそれよりも早く、いずれにしても日本人が抱いたスイスへの憧憬が、建築物の形となって表現された 1970～90 年代の事例は枚挙に暇ない。

TV アニメ『アルプスの少女ハイジ』（1974 年）放映の影響も相まって、日本の山岳・スキーリゾート地にスイス・シャレーや山小屋風のホテルやペンションがさらに増えていく。しかし都内にあった徳川家の英チューダー様式の邸宅が 1968 年に八ヶ岳に移築され、ドラマ『高原へいらっしゃい』（1976 年）のロケ地にもなったことをきっかけに、国籍不明なハーフティンバーも、高原のイメージ演出に相応しい意匠として定着するようになり、ハーフティンバー調のホテルやペンションがさらに増えた。バブル期は日本人が海外旅行・滞在を頻繁に行うようになり、現地のスイス・シャレーを見る機会が格段に増加したため、より本物のシャレーに似せようとした宿泊施設が建設されていったが、依然としてハーフティンバー意匠の建物もまた、高原リゾート地を中心にさらに増加していった。ハーフティンバー意匠の山小屋風は、宿泊施設や別荘だけではなく、役場、交番、消防署、公衆便所、観光地に付随する博物館やレジャー施設にも採用され、スイス風とチロル風が混同されることも多く、欧米でのスイス・シャレー建設の流行と、20 世紀の日本での疑似的なスイス風建築とシャレーの模倣は、性格を全く異にすることがわかった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 河村英和	４．巻 32
２．論文標題 日本各地で派生した「スイス村」計画の変遷と現状	５．発行年 2021年
３．雑誌名 跡見学園女子大学マネジメント学部紀要	６．最初と最後の頁 63-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 河村英和	４．巻 16
２．論文標題 長野県内に派生したスイス風建築とスイス的なる風景（２）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 コミュニケーション文化（跡見学園女子大学文学部）	６．最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 河村英和	４．巻 1
２．論文標題 日本の山岳・高原リゾート地における疑似スイス風シャレー建築と英国風・チロル風ハーフティンバー様式	５．発行年 2022年
３．雑誌名 観光コミュニティ研究（跡見学園女子大学）	６．最初と最後の頁 23-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ewa Kawamura	４．巻 2
２．論文標題 Lo stile dello chalet nelle strutture per la cura del latte svizzero nelle localita' a pie' dell'Alpi nell'Ottocento　(19世紀のアルプス山麓にある地域のスイス式ミルク療養施設のシャレー様式建築)	５．発行年 2021年
３．雑誌名 La citta' e la cura / The city and healthcare (Insights, Aisu International, Torino)	６．最初と最後の頁 367-379
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Ewa Kawamura	4．巻 1
2．論文標題 Japanese mountain landscape with the villa and hotel architecture inspired by the Swiss chalet and half-timber style（木骨造とスイス・シャレーから着想した別荘・ホテル建築のある日本の山岳風景について）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 TOURISCAPE2. Transversal Tourism and Landscape, Universitat Politecnica de Catalunya, Barcelona	6．最初と最後の頁 309-322
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 河村英和	4．巻 15
2．論文標題 長野県内に派生したスイス風建築とスイス的なる風景（１）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 跡見学園女子大学コミュニケーション文化	6．最初と最後の頁 45-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　1件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 河村英和
2．発表標題 日本人のスイスへの憧れとシャレー風のホテル・ペンション・ 別荘建築の興隆について
3．学会等名 日本観光学術学会（JSTS）　2020年度第９回大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 Ewa Kawamura
2．発表標題 La tipologia architettonica e lo stile di chalet alla svizzera nelle strutture per la cura del latte nelle localita' a pie' dell’Alpi nell’Ottocento (19世紀のアルプス山麓の牛乳療養施設におけるスイス風シャレー建築について)
3．学会等名 Convegno AISU “La Citta' e la Cura. Spazi, istituzioni, strategie, memoria", Universita' di Pavia (on-line)（国際学会）
4．発表年 2020年

１．発表者名 Ewa Kawamura
２．発表標題 Japanese mountain landscape with the villa and hotel architecture inspired by the Swiss chalet and half-timber style（木骨造とスイス・シャレーから着想した別荘・ホテル建築のある日本の山岳風景について）
３．学会等名 International Scientific Conference TOURISCAPE2. Transversal Tourism and Landscape, Universitat Politecnica de Catalunya, Barcelona (on-line)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Ewa Kawamura
２．発表標題 Mutamento della tendenza degli articoli della rivista “L’Albergo in Italia” (1925-1943)
３．学会等名 Convegno di studi per le celebrazioni del 125° anniversario del Touring Club Italiano "L’Italia del Touring, 1894-2019"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Ewa Kawamura
２．発表標題 Segni dell'identita' nazionale dei diversi paesi nelle strutture ricettive in Italia. Il caso degli alberghi fondati dagli immigrati svizzeri
３．学会等名 AISU (Associazione Italiana di Storia Urbana)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Ewa Kawamura
２．発表標題 Tipi e vicende degli chalet e villaggi svizzeri ‘fuori dalla Svizzera’ fra Ottocento e Novecento
３．学会等名 CIRICE 2018 "La Citta' Altra / The Other City"（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

1．著者名 Ewa Kawamura	4．発行年 2019年
2．出版社 Bruno Mondadori	5．総ページ数 pp. 255-267
3．書名 Segni dell ’ identita' nazionale dei diversi paesi nelle strutture ricettive in Italia. Il caso degli alberghi fondati dagli svizzeri fra Ottocento e Novecento, in AA.VV., La citta' multietnica nel mondo mediterraneo, a cura di A. Naser Eslami e M. Folin	

1．著者名 Ewa Kawamura	4．発行年 2018年
2．出版社 FedOA - Federico II University Press	5．総ページ数 pp. 323-329
3．書名 Tipi e vicende degli chalet e villaggi svizzeri 'fuori dalla Svizzera' fra Ottocento e Novecento, in La Citta' Altra	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関